

4年1組

 いっしょに生きる わたしたち
 ～地域のパン屋さんで働く M さんに会って～

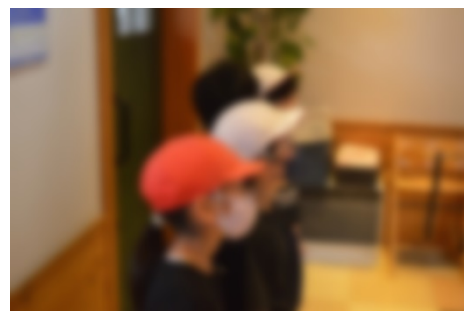

あたたかいお店だなあって思いました

5月、「ともだち」（谷川俊太郎作）の絵本の読み聞かせの後、「先生、なんか、友だちってよくわからなくなってきた。どういうことが友だちっていいのか…分からなくなった」とRさん。本の中で、障がいのある子どもや貧しい生活を強いられている海外の子どもの写真が紹介され、「どうしたらこの子と友だちになれるのだろうか。遠くても、この子は友だち」という筆者からの問いかけでした。

道徳科「見えないしょうがい」の授業のときでした。視覚障がい者の方の生活を紹介した本文を読み、「こういう風に言っちゃだめだと思うんだけど、ちょっとこわいって思う」とHさんが話しました。続けて、「私も、正直、失ったところがあったり、小さい子どもが障がいをもっていたりすると、かわいそうだって思う。言っちゃいけないって思うけど」と、Aさんが話しました。そして、身近な地域に目を向けると、障がいのある方が働いているお店があることが話題になりました。子どもたちは働くその方を想像しながら「どんな仕事をしているのだろう」、「どんな思いで仕事をしているのだろう」と関心を向けていきました。

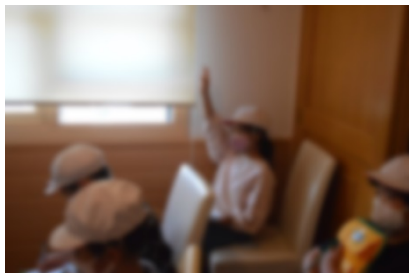
6月、障がいのある人もない人も一緒に働いている地域のお店について調べていきました。Hさんが、「ちょっと聞いちゃいけないかなって思うんだけど、お店を建てた社長さんに聞いてみたいことがあって、障がいのある人、障がいのない人が一緒に働くお店をどうしてつくろうとしたのか聞きたい」と話しました。Hさんの思いを聞いた子どもたちは、「私もお店で働く人の姿を見て、障がいとどう向き合っているのか、自分の苦手とどうやって戦っているのかを知りたい」、「障がいのある方がどんな仕事をしているのか知りたい」、「私は差別ってどうしてあるのかなって思って、学校に行けない子どもたちもいるし、そういうのをなくしたい。そのお店を見学して差別をなくしたい」と話していきました。そして、「あのね、わたしね、障がいをもっている方はね、障がいをもっていない人を嫌に思っているんじゃないかなって思うの。差別をするのは、障がいをもっている人を、障がいのない人がそうやって思うからで…だから、自分のことが嫌になったりするんじゃないかなって」というIさんの言葉から、そのお店で働く方の思いを想像していきました。

6月24日。子どもたちはそのお店で働く店員さんとオーナーの方に会いに行きました。「どうしてこのお店で働きたいと思ったのですか」、「このお店はバリアフリーになっていますか」など、子どもたちの質問に笑顔で答えてくれるお店の方々。そして、「みんなはすごいね。そういう勉強もしてくれているのね。そう、バリアフリーのところもあるんだけど、階段とかは車いすの方が自分だけで上れるようになっていなくて、これから進めていかなくてはいけないの。建物のバリアをなくすこともすごく大切。でもね、心のバリアって分かるかな、その心のバリアをなくしていくことの方がもっと大切だと思うのね」と、オーナーの方が思いを伝えてくれました。



バリアフリーについて質問したNさんは、見学で感じたことを日記に書いていました。

バリアフリーは、「心」をバリアするという意味だよ、と言われたときに、確かに、バリアフリーは障がいのあるないに関係なく、みんなの「心」をすべての人が「バリア（守る）」という意味じゃないかなと思いました。（障がいをもちながら働いている）Mさんは、やさしくてとても元気づけてくれる方でした。最後、話が終わってから、「お勉強がんばってね」と言われたとき、温かかったです。



Nさんの「バリアフリー」という話から「心のバリア」について、見学を振り返りました。Kさんが話し合いの最後に、「お店に行って思ったんだけど、障がいがあるとかないとか、全然、全然関係ない。ぼくたちとも何も変わらないって思う。それより、20年間もサンドイッチを作ったり元気な声でみんなにおいしいって言ってもらいたいって思って働いているMさんはすごいと思う」と見学を終えた気持ちを話していました。

そしてSさんは、「ぼくたちはさあ、障がいのある人をじ〜っと見るとか調べるとかそういうんじゃなくて、一緒に過ごすっていうか、そういう風になりたい」と自分自身の在り方について見つめていきました。

障がいを理解しようとその人に会うのではなくて、私たちと一緒に過ごす「一人」として会いたいということ。私たちの学校のすぐそばには特別支援学校で生活している同じ仲間たちがいます。子どもたちはSさんの思いを聞いて、今、小学部の友だちとの交流の機会を望んでいます。夏休み明け、すてきな出会いが待っています。